暖かい講義録

清水久美子

追悼文集の原稿依頼文書にて初めて、徳永さまがご永眠なされたことを承り、一昨年５月の鳥羽での研修旅行の折の元気なお姿を懐かしく思い起こしています。

なにわ会館でのセミナー終了後のお話で、「私はいつでも、今日が最後かなあ、と思いつつ聴講しています」と仰っていましたが、私が偶偶早い時間にカルチャールームの扉を開けた日には、もう一番前の席にきちんと座っておられました。そのたびに私は、遅刻寸前に飛び込んで来るようなことをしてはいけない、と身の引き締まる思いでございました。

徳永さまの手書きの講義録を、私は一冊だけ頂きましたが、セミナーの奥深い内容を消化しきれずにボードの文章を必死になって写していた私にとって、それは、家庭学習の唯一のよすがでありました。その後、事務局幹事の宇賀治先生に「あれの次の講義ロクはまだですか」とお尋ねしますと、「あれが最後だとおっしゃっていたでしょう」とのお返事に、一瞬息をのみましたが、改めて、徳永さまの渾身の力を振り絞っての御労作に思いを致し、講義録を見返したものでした。それは、水上先生の序文とともに、写真や図を見事に配置された暖かい講義録でした。

現在、セミナーで、難しい日本語文に呻吟しつつも、古代文字やシェイクスピアなどの余話にほっと一息つかせて頂いて、頑張っています。

徳永様、本当に有難うございました。